

## 公立小学校における地域とつなげた自然観察学習 —子どもたちがヒトらしく生きるために—

What do children in the 6th grade of the primary school find  
from the observing some group of living things for one year  
in a natural park close by the school?

津吹 卓<sup>1)</sup>  
Takashi TSUBUKI

平木 正行<sup>2)</sup>  
Masayuki HIRAKI

### 要 約

私立の中学・高等学校の教員が地域のボランティアの立場で、公立小学校の教員と協力して教育活動を行ない、6年生2クラスの児童が理科の知識をベースに総合的な学習の中で年間25時間程度を使って自然体験学習を1年間継続した。テーマは班で決めさせた。この児童たちは1年生のときから、自然や生き物がある程度継続的に観察する中で育ってきた。この学習のねらいは、1年間の観察体験を通して、生きているとはどういうことか、1年間の中で生き物はどのように変わるのか、について体験的に気づき学ぶことにあった。指導の流れは、「調べる→関わる→まとめる→表す→生かす」であった。

筆者等は児童の主体性を大事にしながら活動を見守り、必要に応じてアドバイスを行なうことで、児童たちは工夫をしながら観察を続けた。児童の受け止め方を、アンケートを通して調べた結果、我々の予想以上に多くのことに気づき、体感し、考え、ヒトも含め「生き物とは何か」について学んでいることが分かった。

### Summary

Today children have a small chance to enjoy insects and plants in their life, and they do not know how living things live in the field. The authors, one is a teacher of junior and

<sup>1)</sup>十文字学園女子大学人間生活学部児童幼児教育学科；十文字中学・高等学校

Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life, Jumonji University;  
Jumonji Junior High school and Senior High school

<sup>2)</sup>東京都府中市立若松小学校

Wakamatu Primary School of Fuchu City, Tokyo

キーワード：自然観察 自然体験学習 地域学習 継続観察 生き物の生き様

senior high school, and the other is teaching at a primary school, tried to lead 40 primary school 6th graders to observe living things in special science lessons every month from spring to winter in a field of the Mogusadai Natural Park lying next to their school in Hino city, Tokyo.

The group of three or four children made their plan and observed the insects, plants, birds, mushrooms and so on from a new standpoint of living things for one year. The children studied in this way with the assistance of the authors and made presentation of their study to the children in the 5th grade. According to the questionnaire, the authors found that the children not only learned but also felt how living things live and realized how important it is for the people, a kind of animal, to live a good life.

## はじめに

これは公立小学校の教員と地域のボランティアとして活動した私立の中高の教員が協力する形で、小学6年生が理科の知識をベースに総合的な学習の時間の中で、班による1年間継続した自然観察を通じて、生き物や自然のとらえ方を体験的に学んだ報告である。

筆者の1人津吹は、30数年前から東京の私立十文字中学・高等学校で理科・生物を担当してきたが、世の中の変化は著しく生徒たちの様子もそれに合わせて変わり、10年程前から自然離れ・生き物離れが以前にも増して激しくなっていると感じられていた。単なる理科離れではすまされない状況が起きていた。自分自身を生き物と思っていない生徒、自分が生きる上で他の生き物とのつながりを全く感じない生徒、すなわち「生き物の感覚を持たない生徒」の急増であった。人の気持ちを理解できずに勝手な行動をしたり、ヒトが死んでも強く望めば生き返ると信じたり、死んだカブトムシも電池を入れると動き出すと思っていたりと、以前なら普通の、素直な生き物の感覚が育っていないのである。これはヒトとして生きていく上で致命的である。しかし残念ながら世の中の変化にともなった全国的な傾向で、21世紀の日本の進み方を考えたときに極めて危険な状態であると思われた。

この状況の中で行なったことが、地元の小学校とタイアップした自然観察であった。東京都日野市立三沢台小学校には隣接して三沢台自然公園があり、当時は末娘もこの小学校の4年生であった。環境も良く、保護者として地域でのボランティアを行なうにはうってつけの場であった。そこで1999年に三沢台小学校とコンタクトを持ち、それ以来三沢台自然公園を中心にした自然観察を通じて「自然の見方」を先生方に分かっていただくとともに、研修日等を活用して理科や生活科・総合的な学習の時間に、先生方と一緒に児童の自然観察の指導を開始した。何人もの先生方と組んだが、もう1人の筆者である平木とは2006年4月の異動までの5年間、同じ気持ちで協力して自然観察指導を行なってきた。小学校の事情で平木は6年生の担任を連続して5回受け持ったため、各学年の指導は1年間しかできなかった。ここでは最後の学年における1年間を通したグループによる自然観察の展開と、児童の受け止め方について報告する。なお、本文中の6年生の指導以外での筆者とは、津吹を指す。

## 1. 今回の実践までの経過

今回の実践に至る前にも、筆者は同様の趣旨で中学生を対象にして、十文字中学・高等学校で以下の活動を行ってきた。1994年に中学2年生全員を対象に、理科の立場から遠足を活用して、都立多摩動物公園で行動観察を行なわせた。ある種類の1個体の動物の行動を班で1日中観察して記録をとり、行動の意味を考察してまとめ発表するという展開であった。このときの生徒たちは動物の生き様を目の当たりにして動物に惹きつけられ夢中で観察し、生きているとはどういうことかを体験的に学んだ(津吹, 1995)。それ以来カリキュラムの関係で展開する学年や場所は変わったものの、2007年の現在まで同じ目的で理科の教員を中心にして学年主催の観察会は継続されている(倉本・津吹, 2000)。そして、生徒たちは動物を観察することから、生きていることについて多くを学んでいることが分かっている(斉藤・津吹, 2007) また、保護者を対象にしたPTAの公開講座で、校庭で自然観察会を実施した(津吹, 2001)。さらに、2001年の夏に十文字高校で開催された日本生物教育会全国大会東京大会で、「子どもの成長と生物教育:『生き物離れ』を考える」と題した研究協議を実行委員会に提案し、幼稚園から大学院までの子どもの成長の流れに基づいた問題提起と幼稚園・小学校・中学校の現場の方々の発表、そして討議を行なった(津吹, 2002)。同様の悩みはレベルの高い都立高校でもあり、生徒の生き物に対する興味や関心を高め、授業にも反映されることを目的に、苦肉の策として毎回の授業ごとに異なった種類の実物の生き物を見たり触ったりすることが試みられた(板山・中村, 2005)。

しかし、手を打つには小学生のときからの指導が重要である。地元日野市では、「友の会」が主催して地域の幼稚園児や小学生とその保護者等を対象にした自然観察会が夏休みを中心に年に数回開かれている。その講師を1996年から引き受けて、生き物がどのようにして生きているのかを実物を見ながらとらえ方を伝えてきた。しかし、この種の観察会の欠点は、どうしてもそのときだけという参加者も多く、その場限りで指導の蓄積を期待できない。当然勤務校とつながる小学校も考えたのであるが、私立の場合生徒の居住地はそれぞれのために協力し合うことは不可能である。この状況の中で今回の教育活動が生まれた。

## 2. 実践の目的

児童が1年間をかけて身近な自然な中での生き物観察を行い、「生き物が生きているとはどういうことなのか」を体感させようというものであった。そのために、次のような生き物のとらえ方を観察の中で児童に体験を通して伝えた。

すなわち「個々の生き物の立場に立って、その生き物の気持を考える」というものである。ヒト自体が生き物であるために、擬人的になったとしても生き物の気持を考えることは誰にでも可能である。最も大切なことは、正しいか間違っているかではなく、生き物の“気持”を考え続けることで正解に近づくことができるということ、そして目の前の生き物を最も良く分かるのは今ずっと見続けている人であり、単に本の知識があれば良いわけではないということである。もちろん知識が増えればその生き物についての基本が分かるので、より正解に近づける。もちろん理科で学んだ生物の知識や理解は考えるベースになる。

児童を指導するには、現場の指導者である担任がこの発想を十分に捉えている必要がある。自然公園での教員対象の自然観察会で偶然起こった次の事例は、大きな意味を持った。晩秋の夕方、自然公園の草原で草に止まっていた1頭の蛾を見つけ、触ったが逃げない。それを捕まえて、そろっと手の中に入れ数分後に手を開くと、蛾は元気に飛び去った。上記の表現を借りれば、蛾の“気持”としては、気温が低いために体温も低く逃げたくても飛ぶことができない状態であった。それが手の中で暖められて体温が上がり、活動できるようになったので飛んで逃げたということであろう。このような体験をし、筆者らはその後も一緒に虫の「生き様」を見たり話し合う中、児童や生き物のとらえ方の価値観が一致し気持が一つになったのであった。

### 3. 対象児童の5年生終了までの育ち方

この児童たちは他の学年とは異なり、生き物に対して発達段階に応じたある程度の継続指導を受けてきた。1・2年は単学級であり、とくに低学年時に生き物について多くの体験をしていた。筆者は担任教諭と一緒に指導をしたが、生活科を通じて虫や植物を見たり飼育・栽培をする中で、子どもたちは体験的にまた感覚的に生き物と触れ合い、生活の中で友だちのように接してきた。低学年はベース作りなので少し詳しく述べる。春には学区の自然の中で、多くの草花と出会い遊びながら名前を教えた。草に名前があることに驚き、名前を覚えると何が咲いていたと報告したり、分からない花は持って来るようになった。家族にも草花を教えるようになり、良く知っていると驚かれた。そして、2年では自然公園周辺の生き物マップを作成した。また、花や野菜を育てる楽しさを味わうために、種を手にとって形や大きさを分かせ、土を耕し肥料を入れ穴をあけて種を入れ土をかけることをすべて子どもにやらせ、発芽に驚き、咲いた花を押し花にして、生活の中で楽しさを味わった。ヒマワリが大きくなったので根から引き抜き教室に持っていくと天井につっかえ、種一粒と比較をすると子どもたちも「おお!!」と言って感動した。一方虫は、畑仕事でミミズと触れ合い、自然公園で虫採りをして教室で飼育した。しかし、関心はあるものの世話は思いつきや限られた子どもであり、担任の仕事になった。保護者も働きかけると虫採りに参加してくれたり、幼虫を届けてくれたりするが、場合によっては虫を持ち帰るのを断るケースもあった。このような活動に対して子どもたちは、全部面白かったが「みんなでやれたから楽しかった」と口々に答えた。3、4年は2学級となり、担任も変わった。子どもたちは主にカイコの飼育を通じて生き物と向き合った。

5年生でまた担任が変わり、再び自然公園を教材とするようになり、筆者らも加わる形で5、6年生の高学年ブロックとしての取り組み、そして自然観察活動が実行された。当時高学年ブロックとしては、総合的な学習の時間の年間計画に自然公園を活用し、子どもたちに自然から様々なことを感じ取ってほしいという願いを持っていた。高学年の系統性を考え、5年では自然観察を基に生き物の見方を体験的に学ばせることにした。そこで、自然公園で月に1度の観察を継続し、最後に1年間の変化としてまとめさせた。

6年ではそれを基に、自然公園の様々な生き物がどのように生きているのかを生き物の立場で（気持で）考えさせ、それを通してヒトも同じように生きているということに気づかせることをねらいとした。このような流れで、低学年から高学年へと系統的な指導が比較的うまく行なわれてきた。



## 4. 今回の実践計画

### (1) 児童の考えた計画

自然公園を使って1年間自然観察をしようと投げかけたところ、子どもたちはグループで、観察テーマを考え、それを基にした「自然公園マップ作り」を企画した。この計画は6年生の4月に立てられた。表1に6年1組の観察テーマを示す。

表1. 6年1組の児童が考えた企画のテーマ

- 
- ①自然公園の植物の1年：自然公園にある植物を1年間調べる活動をする。木や花が季節によってどのように変化するか、どれぐらいの植物の種類があるのか調べる。また、日野市の植物と自然公園の植物と比較をする。
  - ②自然公園のキノコ：自然公園のキノコがどのようなところに生えているのか、キノコの種類はどれぐらいあるのか、どんなキノコが食べられるのかを調べる。
  - ③自然公園に集まる鳥：季節によってどんな鳥が集まるのかを観察をする。
  - ④自然公園の虫：虫を探し見つけた場所を季節ごとにまとめる。
  - ⑤自然公園の花と木：どこにどんな花が咲いているのか、どんな木があるのか調べる。
  - ⑥自然公園のタンポポ：タンポポの種類を調べ、種類により生えている割合を調べる。
- 

### (2) 教師側の計画

教師側では、総合的な学習の中で年間25時間程度を自然体験学習で使い、子どもたちに「調べる→関わる→まとめる→表す→生かす」(図1)、の流れを目指したプランを立ててみた。具体的に示したのが図1である。そして基本的に1箇月に1度の割合で自然公園へ行き、班ごとに観察を行なうための時間を確保した。また、その後のまとめの時間と発表の時間も組み入れた。発表に関しては来年度のことを考慮して、6年生が5年生に例を見せて様子を伝えることを意図して、体育館で同じ時間に総合的な学習の時間が確保できるようにした。

#### 〔グループの課題の決定〕

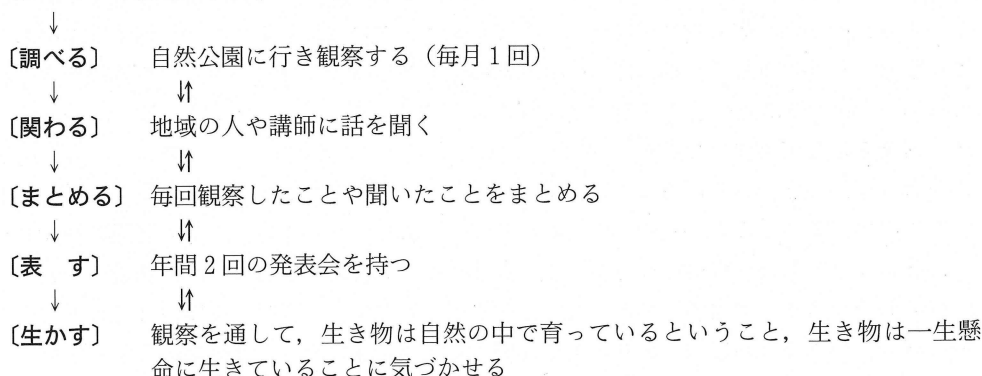


図1. 教師側の考えた自然体験学習の流れ

## 5. 実践経過

### (1) 活動状況と指導の効果

実際に自然公園に入って観察をしてみると、なかなかうまくいかずに困っている子どももいた。一方、グループでの観察なので、協力してポイントをつかんで観察できた班もあった。1年間を通して活動していくと、子どもたちはどうしても行き詰まることが生じる。子どもたちがそれを考えたり調べたりしながら解決する中で、かなりの気づきがあった。1例としてキノコの班について述べる（図2）。この班は「キノコがなかなか見つからない」と困っていた。そこで教師側として、なぜキノコが見つからないのかを考えさせた後、ヒントとして生えそうな場所を考えさせた。「キノコはジメジメしたところに生えるのではないか」と気づき、そのような場所を重点的に調べてみるとかなりのキノコを見つけられ、時間を有効に使えた。単に歩き回るのではなく、生えていそうな場所の目星をつけることで、見つけやすくなることを学んだようであった。

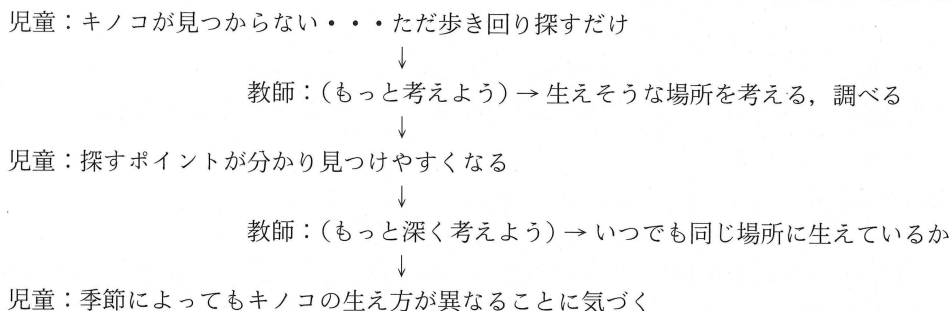


図2. 教師の支援と児童の変化の例《キノコの観察班》

さらに問題は起こった。子どもたちの企画の中の「キノコの種類」と「どんなキノコが食べられるか」についてである。これはかなり専門的な知識を要するので、生える場所を中心に調べるようアドバイスした。これでキノコを調べる視点がはっきりし、取り組む意欲が増したように感じた。他にも昆虫の班で「冬になると虫がいらない」と言うが、秋までは地上だけを探していた。そして、冬は寒いので地面の中にもいるのではないかと気づき、掘ってみたり枯れ草の下を見たり、木や石の下を探すようになった。

### (2) 指導を通して気づいたこと

児童は思いつきでいろいろなことを調べたがる。調べたいことが気楽に素直にたくさん出てくるので、すべきことは無限に広がる。また不可能なことも多い。そして実際にやってみて、どのようにしたら良いのか分からず行き詰まる。総合的な学習の時間で課題を設定し、それを解決することは大事である。しかし解決が困難な場合は教師の支援がとても重要であると感じている。今回は担任が6年生を連続して4年間受け持った経験が、うまく生かされたと思っている。

実は、下記のような一般的なアドバイスを2回行なった。1回目は子どもたちの計画内容

が広すぎるので修正のために、2回目は実際に観察し始めた結果を基に観察方法を考え直すためであった。

- ア. 観察しようと思っている相手は何ですか（調査の対象）
- イ. 相手のどんなことを調べようと思っていますか（調査内容）
- ウ. どこで調べようと思っていますか（調査場所）
- エ. どうやって調べるつもりですか（調査方法）

しかし、6年生の発達段階としては、観察をそのまま継続していくとどうなるのかを予測するのは難しかったようである。上記のキノコにおける「種類」と「食べられるかどうか」もそうだが、昆虫・鳥・植物の正確な種名は専門家による同定が必要である。だから、種類を広げるべきではない。また今回の目的にはそれほど意味があるものでもない。それを見越して、タンポポに限定したり、マツの雌花（松ぼっくり）の成長の変化等をテーマ例として示した。しかし、観察していたタンポポが刈られて観察不能になったり、マツの枝が成長して高くなったりマツの木までの道が丈の高い草に被われて測定不能になったりして、テーマを変更せざるを得なくなった場合もあった。ただ、種名については子どもたちはそれほどこだわらず、現実的に適宜分かる範囲に止めてうまく進めていた。

なお、この観察の中で、普段教師も気づかないことを「子どもの発見」を通して担任の立場で知ることができたので述べておく。2月の観察で虫の観察をしていた子どもが「先生、ホタルの幼虫がいる」と言って呼びに来た。子どもたちは自然公園の池の周りで調べていたのである。そこで一緒に行き、子どもの言う石の下を見ると、確かにホタルの幼虫らしきものがいた。「先生、大発見だよ」「ホタルの幼虫はきれいな水にいるから間違いないよね」と確信している。そこで「この幼虫が親になったらどれくらいの大きさになると思う」と問かけると「ホタルの大きさだよ」と気持がホタルから離れない。そこでカブトムシの例を出したところ何人かの子どもが頭をひねり始めた。「よし、調べてみよう」ということで学校へ戻り、一緒に図鑑で調べた。そして「ホタルに間違いない」と何人もの子どもたちが改めて確信する中、1人の子どもが他の図鑑を見て「これに似ていない？」と言いだした。それはヘビトンボの幼虫であった。形だけでなく、大きさもピッタリ合っていた。子どもたちはがっかりしたものの、今度はホタルとヘビトンボと両方について調べ始めた。このことを通して、学習とは自然の中にきっかけがたくさんあり、敢えてこちらがルールを引かなくても、このようなことからたくさんのことを学んでいくのだと改めて感じた。

### (3) 実践を進める中で起きた計画の変更

これは観察を進める中で結果的に起きてしまったことである。上記のようにタンポポやマツ等の観察が予定通り行かないことが起き、また個々の生き物を見ることを目的にしていたが児童たちが思ったようには種名の確認が十分にはできなかったため、マップ作りにはうまくつながらなくなった。その代わりに児童はもっと広く観察を行なったことで、四季を通して、観察される虫の種類が変化したり花の咲く植物の種類が変化することを体験的に知り、季節に基づく変化をとした生き物のとらえ方を学んだ。また、季節変化に伴う生き物の変化の雰囲気を体感している児童もいた。

## 6. 実践の成果

### (1) まとめの発表

観察結果の発表会を2度実施した。1度目は10月の学校公開の日で、今までの観察や調査結果が中心になった。三沢台小学校の子どもが自然公園とどのように関わっているのかを地域や保護者の方に見ていただきたかったが、設定時間やPRの関係で、参観者が少なく残念であった。2度目は卒業間近の3月であった。体育館で5年生を招待して1年間の成果を発表した(図3)。班によりパワーポイントも使用した。質疑応答が結構活発になり、時間が延長してしまった。これは高学年での系統性を考え、6年生の観察方法や生き物との共生のとらえ方を5年生に理解してもらおうと教師側が意図したことである。5年生は、次年度に行なう内容が理解できたのではないだろうか。その後卒業式まで、発表会で使用した資料や自然公園マップを5年生の教室の前に掲示した。

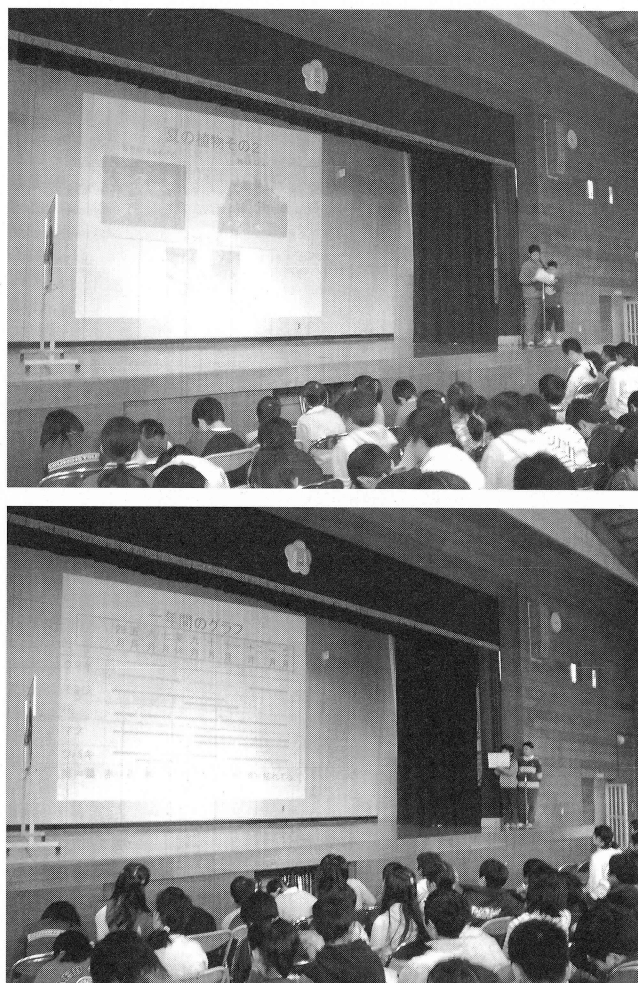


図3-1, 2. 1年間の植物の変化を発表する児童

## (2) 児童へのアンケート結果と考察

これまでの自然公園での観察、とくに6年生でのグループによる1年間の生き物の観察に対して、子どもたち一人ひとりがどのようにとらえどのように感じたのかを知るために、2006年3月の卒業前にアンケートを実施した。以下に項目と結果を示す。

1)「アンケート：自然との関わりについて」の結果（6年生1, 2組合計40名）

[1] あなたは自分が生き物だと思いますか

①YES 39名（97.5%） ②NO 0名 ③良く分からない1名（2.5%）

[2] その理由は（複数回答）

《①YES の理由》

- a. ヒトも含めて虫・動物・植物は皆同じ生き物である（命がある；人間という動物が生きている）11名
- b. 生きている：11名；動く：6名；呼吸している：10名
- c. 食べ物を食べる：9名；水を飲む：8名；
- d. その他各1名：育って大きくなる；心がある；ヒトと動物の違いを学んだ；生き物は生き物からできる

《③良く分からないの理由》

生きているから生き物と言えるが、犬や馬や虫を生き物と言うので良く分からない

[3] あなたは自分が生きるために、他の生き物とつながりがあると思いますか

①YES 37名（92.5%） ②NO 0名 ③良く分からない3名（7.5%）

[4] その理由は（複数回答）

《①YES の理由》

- a. 食べ物（肉・魚・野菜）を食べる：22名；命のあるものを食べる：5名；食物連鎖：1名
- b. 酸素を吸う：7名
- c. 1人で生きられない（つながりがあるから、助け合えるから生きられる）：5名
- d. その他各：1名：同じ心を持つ；息や心臓等の共通点がある；自然の中で生きている

《③良く分からないの理由》

良く分からない：2名；どうつながるのか不明：1名

2005年度のアンケートの中の質問〔1〕～〔4〕の結果を過去2年間のものと比較してみた。今回と比較して、例年の児童は6年生になるまでの自然体験が少なかったため、6年生の1年間で季節の変化応じたその時々での観察であり、今回のようなテーマに基づく継続観察ではなかった。質問〔1〕、〔3〕に対する結果の人数ではそれほど大きな違いは見られなかったが、その理由に今年の特徴が現れていたように思われた。具体的には次のようになった。

〔1〕については例年大部分の児童が「自分を生き物だ」と思っている。しかし、「良く分からない」児童が2003年度で6/32、2004年度で3/49いた。また、生き物だと思う理由は、過去においては個人的な感覚が多く多岐に渡っていた。その中でb, cは多いのであるが、今年

度はとくに「人も含めて動植物は同じ生き物」という発想が多かったのが特徴である。[3] も例年大部分の児童が「他の生き物とつながりがある」と答えており、その理由としては a. 食物によるつながり、b. 呼吸によるつながりが例年多い。理科の授業で学ぶ食物連鎖や植物の光合成に絡む酸素・二酸化炭素の出入りの知識がつながるのであろう。一方、「良く分からない」児童が2003年度で3/32, 2004年度で3/49おり、つながりのイメージが持てないということであった。

さらに児童の様子を知るために、1年間の観察を通して何を体感したのかをアンケートで聞いてみた。

**[5] あなたはこの1年間、自然公園で動物や植物、虫やキノコなどの観察してきました。生き物と1年間触れ合って、あなたの感じたことを教えてください。**

するとここには、児童の発想として、体験を通して何を学び何を感じたのかが率直に書かれていた。これらを思考や感じ方の深まる方向へ並べると次のようになる。

まず、児童が事実としてとらえたこととして、①身近な生き物の多さ、②1年を通じての生き物の変化、が述べられた。以下に具体的に述べる。

#### ①《生き物の多さ》6名

- ・自分の知らない草花がたくさんある；いろいろな虫がいる；こんな身近に生き物がたくさんいるんだと実感した
- ・ヒト以外の生き物は数え切れないくらいの種類があった；鳥にはいろいろな種類があった2名

#### ②《1年間での変化》11名

- ・1年間のタンポポの成長はすごく、とくにセイヨウタンポポは何回も花を咲かせていた、1年を通して見ると育ち方が分かった；植物（マツやサクラ）は季節に従ってちょっとずつ変化があることが1年間調べて分かった2名；1年間の中で変わっていくのをすごく感じた；1年中同じ時間はないのだなと感じた
  - ・虫は夏にはいるのに、冬になると植物がなくなり虫もいなくなるので虫にも植物が必要だと分かった
  - ・皆季節に合わせて出てきたりいなくなったりするのでヒトとは違うと思った；植物も季節に応じて工夫して生きている；季節により動物・植物・虫の種類が違う
  - ・虫などは僕たちと同じで日々変化している
- 次に、一般論も含めてではあるが、自然の大切さを感じた意見が多くあった。

#### ③《自然の大切さ》13名

- ・調べてきて自然や生き物の大切さを知った；自然はヒトや虫や動物たちに欠かせないもの；動物を残すには自然が必要；これからも自然に目を向けたい；虫や植物も生きているから大切にしなければいけない；自然を大切にしなければ（守らなくては）いけない6名；生き物は素晴らしい・生き物は大切2名

さらに、生き物の具体的な生き様から、次のようなことを感じ取っていた。

#### ④《生き物から感じること》6名

- ・生き物はいろんな行動をして自分たちに何かを伝えていると感じた

- ・ヒトは他の生き物を見直すようなことをしないのか
  - ・生き物（小さな命）もヒトと一緒に一生懸命生きている2名
  - ・植物も栄養を蓄えてちゃんと生きているんだと思った
  - ・1年間花を調べて、花は雪が降っても元気に咲きすごいと思った
- そして最後であるが、生き物や自然のとらえ方・感じ方を述べた児童がいた。

#### ⑤《自然のしくみ》7名

- ・虫と植物の関係を見ると、虫はいろいろなところにいてそれぞれ違う食べ物を食べ、人間みたいに自分勝手に森林を破壊したりせずに限られた食べ物・住みかで生きていることはすごいと思った
- ・互いに共存する生き物と、エサや住みかを奪い合う生き物がいた
- ・虫も自然もみんな生きているんだと感じた
- ・生き物は自然の中で育っているんだと感じた
- ・自然には（まるで）命があるように変化している、と感じた
- ・自然公園にいた虫たちを見て、面白い冬の過ごし方などを見て、すごいと感じた
- ・なぜか自然公園に入ると心が安まる；自然は元気をくれると思った

子どもたちは1年間の継続観察を通じて、素直に自然を眺め、変化に気づき、生き様をそのまま受け入れ、思考を通じて自ら学ぶという体験を行なったのではないかと考える。

そしてこの学習を通して、自然の中で生き物が私たちと共に生きていることを感じたのではないと思う。鳥・昆虫・キノコ・植物など、生きているものは皆私たちと同じ命を持ち、それぞれにうまく生きていることを改めて知ったのではないと思う。

実は、子どもたちがこの観察をどのように受け止めたのかを知ろうとして、理科の授業の中でテーマのグループ別に、①メンバー、②課題、③調べたり観察した内容、④まとめ（私たち葉自然や環境とどのように関わって生きているのだろうか）について話し合わせプリントに書かせてみた。ところが、④の内容を見ると、お題目のように「自然は大切である」とか、「地球の問題で自然がなくなってきているので大切にしていけないといけない」「自然公園が近くにあり恵まれている」「植物は二酸化炭素を酸素に変えてくれる」等の教科書的な記述がたくさん出てきてしまい、こんな程度だったのかと我々は落ち込んでしまった。また、話し合う中で共通の意見を書くことで一般的な答になった可能性もあろう。そこで発想を変えて、理科の授業から切り離した「終わりの会」で子どもの発想も自由に出るようにアンケートに含めて尋ねたところ、上記のような答が出てきたのである。子どもは素直なだけに、本音が出やすい環境作りが大切なことを改めて知らされた出来事であった。

## 7. 今後の課題

今回の児童に関しては、体験が児童の中にどのように残るかである。知識ではなく体験を通して気づいた発想が、中学へ進学して学ぶ理科等の中で、また生活の中で、うまく結びつき発展できるかである。現実としては個人に任せるしかない。しかし今回のような見方で「生き物の世界」に気づけば、それは可能ではないかと考える。

指導においては、担任がどこまで指導し、児童にどこまで観察をさせ、またその結果を筆者



らが情報交換して指導方法変更しながら融通を利かせるかであろう。しかし現実的にはこれ以外の教育活動が極めて多くあり、児童も教員も多忙である。その中では、できる範囲でできることを継続して行なうしかない。学年間の理解と協力、そして保護者への働きかけも大切である。中学校との指導のつながりもあろう。考えられる理想はいくらでもあるが、現実的にはこれも限度がある。

結局は、対象児童を活動の中でどれだけ本気にさせ、どれだけ自分のものとしてとらえさせ、自ら伸びていく状況を創るかがもっとも重要であり、児童の発展につながることはないかと思う。生き物との出会いは一期一会であるが、教育の場面もやはり一期一会なのである。

## おわりに

この実践の目的は、正しい答を出して覚えることではなく、自分で見つけた謎を、1年間生き物の動きや変化を観察することで、生き物から学びながら考えて答を自ら創っていく体験をすることであった。この体験を通して気づいたことは、もしかすると間違った答かもしれない。しかし、この発想を身につければ、今後も自分で勝手に継続して自然や生き物を見ていくことができるであろう。その中でゆっくり正解に近づいていけば、それで十分であろう。知識として身につけたことは、時間が経てばその内忘れてしまう。しかし、体験を通じて自ら感じ自ら考えてしたことは、体の中に残っているものである。

今の子どもたちは身近に自然があっても、生活の中でそれを取り入れることが少ない。一昔前、遊びの中で全員が普通に学んだごく当たり前の生き物としての感覚を、今の子どもたちにも伝えていかなくはいけない。これは単に理科や総合的な学習の時間という観点からでなく、生き物であるヒトとして生きていくためには、必要不可欠であると考える。これは小さな試みであるが、子どもたちの中へ蒔いた種が今後時間をかけて育ってくれることを望みたい。

三沢台小学校は自然に囲まれた素晴らしい学校であり、そこには学習の題材、いや学習の宝がたくさん眠っている。最後の学年で自然と深く触れ合うことで、子どもたちは友だちや人との関わりが変わったように感じる。学校教育の中でITも大切だとは思いますが、自然の中で思い切り体を動かし自然に目を向けることの大切さ、そして地域の人との触れ合をもっと活用すべきだと感じた。

## 謝 辞

次に挙げる方々は、日野市立三沢台小学校に勤務されていた当時、協力的に活動して児童の指導に当たってくださった。現在は異動されてすでに三沢台小学校にはいらっしやらない。当時校長であった廣田敬一先生・垣内成剛先生は実践を快く受け入れてくださっただけでなく、積極的に押し進めて教員の夏期研修会を開いたり、自らも教員のための観察会に参加してねらいを理解してくださった。山口祥子先生は低学年を中心に何年も指導をしてくださり、保護者にも児童の観察会に参加することを働きかけ、また今回報告した6年生が低学年のときに自然観察のベース創りを指導してくださった。野崎晴久先生・鈴木茂子先生は考え方を十分に理解して、主体的に自然観察指導をしてくださった。これらの方々に厚くお礼申し上げる。

## 文 献

- 板山裕・中村厚彦, 2005. 毎回の授業で, 生き物を見せる「今日の一品」―都立国立高校と九段高校での実践―. 都生研会誌41: 34-37.
- 倉本泰治・津吹卓, 2000. 上野動物園で展開した中1の動物観察. 一秋の学年行事「見学会」と理科とのタイアップ. 十文字中・高紀要22: 1-29.
- 斉藤寛之・津吹卓, 2007. 上野動物園での動物観察を中1の生徒はどのようにとらえたのか. 十文字中・高紀要29: 1-15.
- 津吹卓, 1995. 動物園での観察から何を学ばせるか―学年行事で動物園を活用してみると……. 十文字中・高紀要17: 29-92.
- 津吹卓, 2001. 第1回PTA公開講座「生き物の気持ちになって自然を見直すと」―虫や花の生き様を探る. 十文字中・高紀要23: 83-93.
- 津吹卓, 2002. 子どもの成長と生物教育:「生き物離れを考える」―十文字高校で開催された2001年日本生物教育会全国大会東京大会より. 十文字中・高紀要24: 1-40.